に第１集を刊行してから10年を経ているので、その後の増加資料を収録した「郷土資料増加目録」を刊行した。これで、昭和30年３月に、その第１着手として、郷土資料目録を刊行してから、11年の年月を費して、本年度をもって予定どおり、全蔵書目録公刊事業に一応の終止符を打つことができた。その後各部門毎に増加した分については、逐次追刊していく計画である。既刊の蔵書目録は次のとおりである。

第１集	郷土資料蔵書目録	30年３月
第２集	蔵書目録　総記、哲学篇	31年３月
第３集	〃　歴史篇	33年３月
第４集	〃　社会科学篇	35年３月
第５集	〃　自然科学・工学篇	36年３月
第６集	〃　産業篇	37年３月
第７集	〃　芸術篇	38年３月
第８集	〃　語学・文学１篇	39年３月
第９集	〃　文学２篇	41年３月
第10集	郷土資料増加目録	41年３月

5　図　書　選　定

館外奉仕用図書については、福島市内の各層から10名の図書選定委員を委嘱し、毎月定例選定委員会を開いて2,600冊の図書を選定した。

福島県立図書館図書選定委員（任期は39年４月から40年３月まで）

片平　幸三　　福島市立北信中学校教諭
国分　　理　　福島県土木部専門委員
（40年９月解嘱）
朽葉　繁子　　労働省福島婦人少年室長
（40年10月委嘱）
小林　清二　　福島大学学芸学部助教授
柴生田　潤　　医師
鈴木　敬治　　福島大学学芸学部助教授
西山　泰男　　福島県農業協同組合講習所教務主任
田村　ユキ　　主婦
茂木　宏哉　　不二物産社長
八木美代子　　主婦
山田　　舜　　福島大学経済学部助教授

第３節　館　内　奉　仕

昭和33年現館舎が新築された当時から同居していた教育研究所が理科センター新築にともない移転したのを機会に、館内の効率的な利用を考えて、大幅な模様替えを実施した。

① 一階は館長室、事務室（総務、整理、奉仕）、整本室を集約して管理棟とし、児童室はもっとも入りやすくということから玄関に近接した旧展示室を当てることにした。

② 二階は図書館のメエンストリートとして、従来の開架図書は勿論のこと、近代図書館の重要な機能を果すための参考室の充実をはかるとともに、一般人の快適な図書館利用ということから、読書室を30人20人収容の小室をあてることにした。

③ 三階は比較的図書館資料の利用の低い高校生を男女別に分け、自由に勉強できる学生生徒室とした。

1　利　用　状　況

(1)　利　用　者

利用者総数（表３）は86,067人と過去５ヵ年の10万台を割ったことになるが、これは昨年度後半より実施した指定座席制の結果によるものと考えられ、児童、生徒、学生が昨年度より24,647人減となっており、一般人は昨年度25,418人、今年度は25,390人とほとんど変りはみられない。むしろ高校生も図書館の収容能力を感知し、従来の退校時に一時に殺到するという弊害が除去され、利用者も図書館も落着いたムードになったことは、現在の座席数、

児　　童	42		
中　学　生	46		
高　校　生	158		
大　学　生	40		
一　般	44	計	330
外に参考席	28	合計	358

から見て、読書環境まで阻害して入館者の数にこだわることよりは、むしろ妥当な状況ではないかと考えられる。

次に月別にその状況（表４）をみると、開館日数とも関係するが、なんといっても冬期間の12、１月そして２月の10,916人がピークとなっている。これは学生生徒の学年末更に上級学校への入試のためということがそのまま現れているが、一般人についても２月は３千人台となっており、学生と相対現象を示しているのは興味深い。もっとも少ないのは４月で一日平均２百人を割っているのは年間を通してこの月だけであり、従来図書館の行事としている〝ばく書〟（利用規則により10月の連続した10日間）なども、年度始めの４月に実施して、すっきりした形で、その年の奉仕活動に望むことが、もっともよい方法ではなかろうかと考えられる。

(2)　読書傾向（資料の利用状況）

利用総数44,137冊は昨年度の59,090冊から比較すると著しい減少を数字の上で示しているが、これは今年度から参考図書は従来の３倍の約 1,000冊を公開して、いちいち利用票に記入しないで閲覧してもらうシステムをとったため、数の上でこれらのものが従来と異ってのって来ないためと考えられる。辞書、事典、年鑑類を僅か一つの言葉、一つの事柄を調べるのにその都度利用票に記入しなければならないということの繁雑さを、統計のための利用であってはならないということから、改めたのである。

実際には28席の参考室はいつも満員で、一般、学生生徒を問わず、各人が自由に資料を駆使して調査研究を行なっており、参考室の充実が近代図書館の大きな役割と考えるなら、更に拡充強化する方向に向わなければならない。

次に各部門別による利用状況は（表５）のとおりであるが、もっとも多いのはやはり文学の23 3%であるが、年々これの占める割合が減って来ており、総体的な利用に移行していることがみられる。特に文学の館内における利用者は調査研究が主となり、読みものは館外に貸出して利用という傾向がはっき